

温泉だけではない登別の魅力

地獄谷の周辺には活火山地帯だからその見所が多い。地獄谷の北東に位置し、周囲約1kmのひょうたん型の沼「大湯沼」。最深部は約25mあり、地底から湧き出た130度の熱湯によって温められ、灰黒色をしている。

また、大正時代に起こった小爆発で生まれた「大正地獄」は直径10mと小さいながらも、10日間程度の周期で湯の量が増減する間欠泉で、今も89度の湯が激しく噴き出し煮えたぎる。湯量が減ったときには地の底から不気味な地鳴りが聞こえるという。湯の色が白、青、黒、ピンク、グレーなど7色に変わることも知られている。

また、地獄谷の周辺は自然の宝庫でもある。「日和山」は今も頂の裂け目から白煙が立ち上がっているが、エゾリンドウ、ガンコウラン、イソツツジなどの高山植物が群落を作っており名所としても人気が高い。

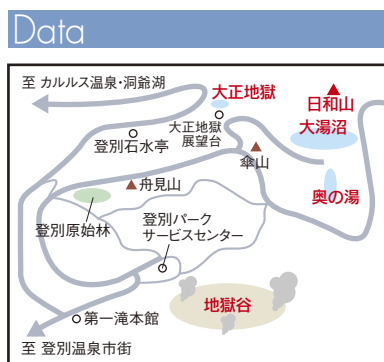
登別市では、こうした1万年前の火山活動がくれた「地獄谷」の恩恵を多くの方々に堪能してもらおうと、その魅力を伝える取り組みを進めている。地獄谷や大湯沼の周辺には自然探勝路が整備され、地獄谷の展望台では5月から10月までの間、観光ボランティアの市民が待機し、希望に応じて案内をしてくれる。ボランティアガイドの説明を聞きながら、地獄の種類や火山性地質の影響を受けた特殊な植物、クマゲラやコミミズクなど数多く生息する野鳥を楽しむことができる。



大正地獄



大湯沼



●お問い合わせ先

登別市観光経済部観光課

Tel. 0143-84-2018

登別市総務部企画課 Tel. 0143-85-1122

Tel. 0143-84-3311

ある。当時は険しい山道しかなく、訪れる人は稀だったらしい。

この温泉地に道をつけたのは、近江商人・岡田半兵衛である。地獄谷の硫黄採掘のために道を開き、湯治人止宿場という共同浴場を作った。さらに、明治維新の混乱期には、皮膚病に苦しむ妻のために山道を分け入り温泉にたどり着き、妻の治療を始めた瀧本金蔵が、その効果に感動し、明治政府公認の「湯守」の許可を取り付けた。大工の腕を生かして湯宿を設け、けもの道に私費を投じて道路を整備し、客馬車の運行なども手がけたという。妻を思う気持ちからいまの登別温泉が生まれたエピソードとしても有名である。

その後、登別温泉は、1905（明治38）年に日露戦争傷病兵の保養地に指定され、「名湯」として全国に名が広まったと言われる。